

サリヴァンと 世界恐慌の時代

精神科医

あへ
だいじゅ
阿部 大樹



精神科医というのが物珍しいのだろう、随筆を書いてくると頼まれることが稀にある。ある程度は慣れているので鷹揚に構えていたが、今回は依頼が経団連からだということでも少し驚いた。国家経済については詳しくないし、それどころか父は聖書に割合と忠実なカトリック教徒で、さすがに金儲けが卑しいことだとまでは言われなかったが、自分の手足で働けと毎日のように言われながら育った。

思い当たるところと言えば、アメリカの精神科医サリヴァンの生涯について少し詳しいことくらいだ。これにしても明るくはない。成り上がった中年男性が大恐慌によって人生を狂わされる話。このご時世なので多少とも用に供するところがあるだろうか。

——一八九二年に生まれたハリー・スタック・サリヴァンは、アイルランドの飢饉から逃れて大陸にや

つてきた祖父母を持つ移民三世である。ペンシルバニア州西部の寒村スマーナで幼少期を過ごす。住人は鉄道の線路を延ばしてこようと色々運動するが実らなかった。吹けば飛ぶような谷間の集落である。学業に秀でていたサリヴァンは州の奨学金をもらって辛うじて進学する。最初は物理学を志したが紆余曲折あつてシカゴ医学校に落ち着く。この時代のシカゴはアメリカ最大の工業都市であり、成長都市に特有の活気と移民流入によるスラム形成があり、そしてアル・カポネを筆頭とするイタリア・マフィアが密造酒の利益を独占していた。禁酒法の時代である。

混沌の中にサリヴァンは高等教育を受ける。スマーナからシカゴへと生活環境が大きく変遷したこと、そしてこの間に同性愛を知ったことでサリヴァンの

時の調べ
Essay

臨床実践は独特なものとなっていく。社会学シカゴ学派の影響を受けつつ、精神医学を人間の相互作用の学問として再定義する新世代の精神医学者としてサリヴァンは華々しいデビューを飾る。交流の深かったのは政治学者H・D・ラスウェル、人類学者R・ベネディクト、言語学者E・サピアであり、サリヴァンがいかに特異なポジションにあったかがよく分かるだろう。シカゴで華々しい成果を挙げ、肩で風を切るようにニューヨークに進出する。一九二〇年代は黄金時代である。摩天楼がまさに完成し

ようとしていた。

しかし一九二九年十月二四日、ニューヨーク株式取引所で株価が暴落した。数字でしかないものが暴れることもないだろうと門外漢としては思うが、しかしこのときには実際に暴力であった。ウォール街近くにあったサリヴァンのオフィスからは取引所の窓から身を投げる会社重役がよく見えたそうだ。精神科医は窓に背を向けて診察するのがセオリーであるが、後ろで人間が落下していくのだから口くろな診療は出来ないだろう。実際、開業したばかりの診療所に患者はほとんどやってこなかった。

彼は自分自身の人生を綴じ込むように『精神病理学私記 Personal Psychopathology』を書き、それ以降は臨床から距離を置くようになる。彼にとって次の舞台は、誰も投身する必要がない社会を作ることだった。第二次大戦を経てサリヴァンはUNESCOやWHOの創成期にアメリカの特任大使として主導的な役割を果たしもあるが、新たな暴力であったマッカーシズムの直前期にあつて、その行動は敵を増やすばかりだった。国際会議の合間に東側要人と非公式の接触をもったことが政府からどう思われたか。一九四九年一月十四日、サリヴァンは突然に死ぬ。自殺とも、自然死とも、毒殺とも言われている。真相は分からない。検死から葬儀まで不自然な十七日間の遅延があつたのは事実である。

——白衣を着ていると時々、自分達がサリヴァンの人生のどこかの切片を生きているような気分になれる。これが歴史の縮小再生産でないことを祈る。

略歴

1990年、新潟県生まれ。精神科医。都立松沢病院、川崎市立多摩病院等で勤務。2019年H・S・サリヴァン『精神病理学私記』（日本評論社）の翻訳で第6回日本翻訳大賞を受賞。他の訳書にR・ベネディクト『レイシズム』（講談社学術文庫）、著書に『翻訳目録』（雷鳥社）。

